



## 第194話

## IDT輪読シリーズ(24)

『インストラクショナルデザインとテクノロジー: 教える技術の動向と課題』

## 第24章: アジアにおけるIDT: 日本と韓国に焦点を当てて

- 著者: 鈴木克明・鄭仁星 (第22回eラーニング連続セミナー登壇者・OPTIMALモデル考案者)
- 「主要な原理のまとめ」+「応用問題」
  - 1) IDTは現在, 両国の教育・研修の実践に切っても切り離せないものとみなされている. eラーニングの進展が, IDT原理の活用を加速してきた.
  - 2) 多くの共通点を持っているが, IDTは, 日本よりも韓国においてより強力に統合されている。それは政府がIDTの専門家を支援し, IDTの知識とスキルを持つ教員を配置するための政策をとってきたことによる.
  - 3) 韓国の研究者はグローバルで一般化が可能な方法を探すことに強い興味を持っている一方で、日本ではIDTにおける日本独特の方法を模索している. IDTの可能性がアジアにおいて十分に実現されるためには, 多様な文化的な状況を踏まえた研究知見が必要になる.
- 日本の事例: 経済産業分野のIDT+学校IDT (ちょっとだけ)
  - IDTを用いない日本のHRDの特徴 スロースタート その幕開け
  - 残された今後へのもう1つの大きなステップ
- 韓国の事例: 企業内IDTリー氏の事例・異なる文脈で異なる役割
  - 創造的・刺激的な仕事ばかりじゃない・すでに大量採用の時代

## 韓国の事例:企業内のIDT リー・ヤンミン氏

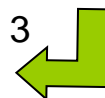
- 千を超える企業や, 政府機関, 高等教育機関, 教員養成機関, あるいは公共機関向けに千本を超えるeラーニングコースやプログラムを作り出してきた一流eラーニング専門企業のチーフPMであり, 経験豊富なIDでもある.
- リー氏は, **IDTの分野で修士号を取得**し, 企業のeラーニングに10年以上携わってきた. 彼女は小さなeラーニング会社で絵コンテ作りを行うところから, 彼女のキャリアをはじめた.
- **5年後には上級IDになり, 7年後にはチーフPM**となった. PMの立場では, 彼女は複数のeラーニング開発プロジェクトを管理している. それぞれのクライアントと直接会って彼らのニーズを確かめたり, 専門家と協議して職務・内容分析を行ったり, 絵コンテの標準フォーマットを開発したり, あるいは, マルチメディア制作スケジュールを調整している.



## 韓国で働くID専門家

### 異なった文脈で異なる役割を担うように要求される

- 実際の教材開発を他の人が担う前に、その教育プロセスについての**仕様書**を策定するだけを頼まれる場合がある。
- コース開発者として、あるいはコンピュータやウェブ技術の専門家として、**プロジェクト全体を監督**する役割が期待されることもある。
- 場合によっては、**ニーズアセスメント**や**課題分析**の段階で関与したり、**グラフィック**や**画面レイアウト**の設計に関わったり、あるいは他にも実際の**学習過程**や**成果**を評価する段階に関与していくこともある。
- 雇用主によって、保有資格や経験に対する期待も違えば、**インストラクショナルデザイナー**に期待する役割も違う



## 韓国で働くID専門家 刺激的で創造的な設計活動ばかりではない

- インストラクショナルデザイナーとして採用された場合には、おそらく最初の数年間は**絵コンテを描く**ことにほとんどの時間を費やすことになるだろう。
- 大学で勉強している時に経験したような刺激的で創造的な設計活動に関わるというよりも、**上級インストラクショナルデザイナーや内容領域の専門家の要求に従う**ことが期待されていると気づくだろう。
- コンテンツ提示には**社内のテンプレート**を用いることが要求され、同社のグラフィックデザイナーが何度となく用いた画面レイアウトを使って、**主にオンデマンド形式のビデオにスライド教材を加えた方式**が採用されるだろう

## 韓国で働くID専門家 大量採用の段階にすでにある

- **韓国政府**はeラーニングに関して、日本や他の諸国よりももっと**戦略的**(Bonk, 2004)
- 1990年代後半の企業におけるeラーニングの急速な成長によって、IDTの概念は企業研修の文脈でより活発に応用
- **大企業は、IDTを学んだHRD専門家を採用することに熱心**
- IDT修士号や博士号を取得した人を、上級インストラクショナルデザイナーや研修担当者として、**高く評価され、高収入**。経営やマーケティング、営業部門のトレーナーや外部の研修企業と学際的なチーム
- アメリカや西欧諸国とは異なり、韓国の大学には**学部レベル**でのIDT教育課程が存在し、**毎年約150人の卒業生**を輩出

## 「応用問題」

- 1) 欧米企業派遣のIDマネージャーが日本や韓国で実施する教材作成で、どのような文化的な要因に考慮することが重要であるか、インターネット等を用いて調べ、文化的感性を評価するルーブリックを作成してみよう。
- 2) 日本と韓国での両方の事例と、自国における自分の経験について、類似点と相違点を表形式にまとめてみよう。

## OPTIMALモデル

- 最適モデルによるインストラクショナルデザインーブレンド型eラーニングの効果的な手法
- 鄭仁星・鈴木克明・久保田 賢一 (著)
- 鄭/仁星: 国際基督教大学教養学部教授。1959年韓国ソウル生まれ。ソウル大学(教育学科)、米国インディアナ大学大学院教育学研究科修了、Ph.D.(教授システム工学)。韓国放送通信大学助教授、梨花女子大学副教授などを経て2003年より現職



## 日本：経済産業分野のIDT スロースタート

- インストラクショナルデザイナーもしくは教育工学者と呼ばれる専門家は、日本ではごく最近まであまり知られていない存在。IDTは、eラーニングの出現と共に脚光を浴びた
- **プロらしい見た目**：IDTが日本のeラーニング業界で登場した時には、最初はまだ、魅力的で使いやすい学習教材の画面と構造を設計するためのもの。教育や研修を効果的にするためのシステムの的なプロセスだということに焦点がシフトするまでには、時間がかかった。焦点がシフトして初めて、研修のニーズや、参加者、文脈、あるいは使用可能なリソースの分析が、IDTの重要なステップとして教えられるようになった
- **ADDIE=ID**：日本の読者にはまだ、IDTがプロジェクト管理とは異なるものであると理解することは困難であった

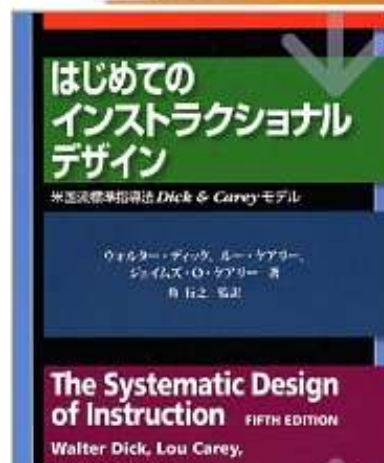


# 日本: 経済産業分野のIDT その幕開け

クリック なか見! 検索



クリック なか見! 検索



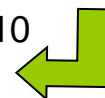
©2014 鈴木克明

eラーニング推進機構 eラーニング授業設計支援室  
ランチョンセミナー



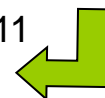
## 日本：経済産業界におけるIDT 残された今後へのもう1つの大きなステップ

- 教材の設計開発という意味のIDTを研修と会社の事業戦略とを結びつける**パフォーマンステクノロジーの概念と結合**するべきだという考え方が浸透することによって、HRDの実践への次の大きな影響が期待できる。
- 逆説的に言えば、このプロセスは、日本の経済成長における現在の**衰退によって助長される**かもしれない。この経済状況によって、今までより多い専門家たちの興味**がHRDの品質**にひきつけられている。研修にはより高い有効性を求め、曖昧で絶えず変化する知識社会での役割を果たせるように企業を**変化させるプロセスを設計**することにも関心が持たれるようになってきた。



## IDTを用いない日本のHRDの特徴

- 高度成長下「**作れば売れる**」: 人材開発においては、従業員個人の成長ではなく、単に生産性を重視していた。
- **研修は報酬**: その背景にある思想は、「日常的な仕事から解放された良い時間を過ごす」ことであった。大手企業は、効果的な個人の成長のための研修プログラムを有していることによってよりもむしろ、有名なリゾート地にある優れた研修施設をアピールし、入社志願者を引きつけようとした。
- 日本企業では、研修部門が特化した専門家で構成された組織であるとは見なされていない。研修部門からは、**2~3年程度で他の部門へ異動**となってしまう状態では、IDTに関連した知識やスキルが、研修部門に蓄積することも困難になる。



## 日本の学校におけるIDT

- 教室におけるIT活用が重視されてきたことで、IDT関連の概念や手法を学校の教師に普及する機会になってきた
- しかし、定期的な教員免許の更新は必要ないため、一度免許を取得すると、テクノロジーに消極的もしくは恐怖症の教師は、それ以上の研修を受ける機会はない。デジタルデバイドは、教師間で、また、それらの教師が受け持つ学習者の間で、減少するどころかむしろ、拡大していくかもしれない。
- **優秀な教育実践は続き、そこで日本人の発想が育まれていく**  
日本の教師は、自分の教科におけるインストラクショナルデザイナーである。日本は今後も、学校の教師が創造的かつ高品質な授業実践を維持していく限りは、様々なメディアやテクノロジーを用いて効果的に学ぶために必要な、若い世代の能力を育成していくことだろう。

